

いい た て 行政区ずかん

東大
むら塾

TODAI MURAJUKU

飯館部



目次

p3	まえがき
p4~7	1 区（草野行政区）
p8~11	2 区（深谷行政区）
p12~15	5 区（小宮行政区）
p16~19	飯樋 4 区
p20~21	10 区（飯樋町行政区）
p22~23	11 区（前田・八和木行政区）
p24~25	12 区（大久保・外内行政区）
p26~27	13 区（上飯樋行政区）
p28~31	14 区（比曽行政区）
p32~35	17 区（関根・松塚行政区）
p36~39	18 区（白石行政区）
p40~41	編集後記
p42	東大むら塾のご紹介



まえがき

飯舘村は20の「行政区」と呼ばれるまとまりで構成されています。1956年の合併で飯舘村ができる前から、それぞれの行政区が一つの共同体として農作業や祭りといった行事を行ってきました。そして各行政区にはそれぞれ特徴的な文化が形成されてきました。原発事故を機にどの行政区も変化を強いられましたが、それでもなお今でも各行政区はそれぞれ個性的な文化や風土を持っています。

東京大学の学生サークル東大むら塾飯舘部は、2020年、2022年と村の方々を紹介する「いいたてむらびとずかん」計2巻を上梓してきました。これらの取材のなかで、地域、行政区のコミュニティがいかに村の文化に重要な役割を果たしてきたかを強く感じてきました。すでに各種村史や「福島アトラス」といった資料がありますが、平成に入ってから、特に2017年の避難指示解除後の新たな地域の様子をまとめた資料に乏しいことに着眼し、この「いいたて行政区ずかん」を作成することとしました。ただ、20もの行政区を一度に扱うことは私たちの今の力では難しく、今回は目次にあります10行政区に限ってご紹介させていただくこととしました。ご紹介できなかった行政区には、伊丹沢、関沢、八木沢・芦原、大倉、佐須、宮内、長泥、蕨平、前田、二枚橋・須萱があります。第2編でご紹介すべく努力してまいります。

編集にあたり次のような方針を取りました。内容は、戦後、比較的最近の情報に焦点を当てています。ごく最近の様子をできるかぎり記載するようにしました。行政区がどう運営されているかという点にも注意を払っているのも特徴的です。本書が焦点を当てていない時期の歴史については、各種村史などをご参照くださればと思います。本文は、行政区長のお話を基調としつつ、既に挙げたような既存の資料も調査し、内容に反映させています。写真は、一部助言をいただきながらも私たちに特に印象に残った場所を中心に掲載しています。

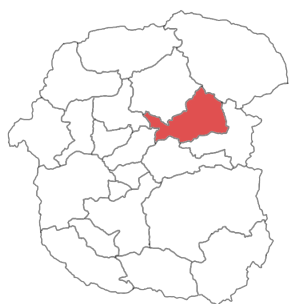
行政区長の方々は本誌作成のために複数回にわたる取材にご協力してくださりました。とりわけ、10区（飯樋町）の渡辺富士男行政区長は、各行政区長へ取り次ぎや様々な助言をしてくださりました。このほかにもお話をくださった村の方もいらっしゃいます。飯舘村役場も、画像の提供などをしてくださりました。この行政区ずかんは、村の皆様が日頃より温かく私たちを迎えてくださったからこそ完成に漕ぎつけることができました。ご協力してくださった皆様に深く御礼申し上げます。

※本事業は、大学等の「復興知」を活用した人材育成基盤構築事業の「飯舘村における将来世代への復興知継承に向けた教育研究プログラム」(代表：溝口勝)の支援を受けています。ここに記して謝意を表します。



1 区 | 草 野 行政区

地理



行政区の中心を川俣から南相馬（原町）へ抜ける県道 12 号線が東西に通っており、車通りの多い賑やかな地区。南相馬市側から走ってくると草野行政区の広い谷を見渡すことができる。東部を中心に北側に大きく膨らみ、山中の地帯も抱えるなど、景色は変化に富んでいる。広い谷の中央を流れるのが新田川である。区画整理をする前は他の川と同様に蛇行していた。川は今よりもきれいで、泳いで遊ぶことができたという。

文化・生活

16 世紀ごろ、草野はかつて、草野郷と呼ばれた土地の中心に位置しており、「大館」と呼ばれた城があった。今でも城跡は小高い山となっている。明治 30 年ごろより飯樋と共に隔年で馬市が行われていた。この馬市を中心に周辺農家の日用品を補う商店も増えていった。昭和 30～40 年ごろに草野は最盛期を迎える。商業の中心は馬市だった。この時期には公共・行政施設が増えていった。馬市が衰退してくる昭和 50 年ごろには飯樋と同様商業の主流は変化していった。

以前は宮内と同じ地区であり、現在でも住所の大字は宮内とともに「草野」を名乗っている。明治ごろに人が多く移入してきた。そのため農地を持つ人が少なく、商業を生業とする人が多いのが特徴。行政区長によれば、近隣の沿岸部の地区では大体の人が一定の農地を所有しており食に困らず商売に身が入ら



渡部 功 行政区長

渡部さんが行政区長になったのは2022年の春から。草野地区では農業従事者が少なく、渡部さんもサラリーマンとして働いてきた。退職後間もなく、農協や森林組合、土地改良区や社会福祉協議会など、副区長の仕事以外にも地域の様々な場で活躍されている。

コラム

ないと言う話もあるが、ここ草野では商業に真正面から取り組む人が多かったという。

かつては役場や小中学校があるなど村の中心的な行政区のひとつで、事故前は230世帯ほどが暮らしていた。商店が並ぶ地帯は町と呼ばれ、村では数少ない信号機も3つ置かれている。村内の八木沢、佐須、宮内、深谷、関沢、小宮、伊丹沢など広範囲から多くの人買いにものに来ていたという。原発事故後は人が少なく商売を行うには厳しいため、戻ってきているのは60世帯ほどで、空き地や空き店舗も見られる。農業の再開も他の行政区と比べて進まず、現在は2人の方に農地を貸して委託している。一方、建設会社や美容室、自動車屋、ガソリンスタンドなど、今でも村内の商店が集まる場所でもある。さらに、5年ほど前から行政区長を中心にまとめられてきた老人会が発端になって地区の集まりを行っており、コロナ期間も検温やワクチン接種回数の報告などの目安を設けて開催を維持してきた。週末ごとに、サロン担当、カラオケ担当、料理担当、囲碁担当などを設けて様々な活動をしている。また、2022年には震災後初めての盆踊りも開催できた。

【葉タバコのいろは】

飯舘村ではかつて葉タバコの生産が盛んだった。渡部区長が子供のころにされていた葉タバコの加工作業の内容を紹介する。

- ①田植えが終わった後、4,5月にたばこを植える。
- ②6月から9月にかけて葉を収穫する。たばこには下葉、中葉、本葉とあり、真ん中から上にかけてはえている葉がもっとも値段が高い。
- ③収穫したたばこの葉を10cmほどの間隔をあけて縄につるして日に当てる。夜露にあたるのを避けるためビニールをかけ、朝になるとまたビニールを取る。
- ④葉は干すと赤茶色になる。干して縮まった葉を冬になると広げる（これを「のす」という）。日中は別の農作業をするので、葉をのす作業は夜になってから行っていた。

昭和40年代以降は機械化が進み葉を干したり広げたりする作業を手作業で行う必要はなくなった。

店・事業所

草野行政区は大まかに、東側に位置する本町・大谷地付近と、役場に向かう交差点周辺の大師堂の2か所に分けられる。本町・大谷地には、「パーマはうす髪化粧」や「飯館自動車工業」、精密機械メーカーの工場もある。「草野郵便局」は休業状態が続いている。昭和期には多くの商店が立ち並んでおり、酒屋や薬屋2軒、スーパーマーケット、旅館、電気屋、豆腐屋もあった。

一方大師堂にはガソリンスタンドの「北原商店」、金融機関の「あぶくま信用金庫飯館

支店」、2023年に開業したカフェの「コーヒーポアハウス」が営業している。公的機関の施設として、公民館にあたる「ふれ愛館」、消防署分署、駐在所も集中している。一時期飯館牛をふるまう「いいたてミートプラザ」が営業していた。「濱田建設工業」「濱田石材工業」の事務所も大師堂にある。このほか、電気店の建物もある。新田川の向かいの旧草野中学校跡地の広大な敷地には、現在工場が何棟も並んでいる。

▼ いいたてミートプラザ開業式 (飯館村役場提供)



▼ 草野集会所



▲ 元町
向かいの信号機も撤去される話がある
◀ 旧草野中学校
(飯館村役場提供)



▲ 大師堂のもっともにぎやかな一帯。北原商店やあぶくま信用金庫、ふれ愛館が並ぶ。



▲ 休業中の草野郵便局 集配も行う郵便局である。



▲ 元町 左頁の写真の反対側



▲ 佐須へと向かう交差点。進むと旧草野小学校が左手に現れ、綿津見神社に突き当たる。



▲ 新館村道路元標 かつて明治期には村に一つずつ道路元標が作られた



2 区 | 深 谷 行政区

地理



現在の村の中心的な場所に立地している。福島と南相馬（原町）を結ぶ幹線道路の県道 12 号線が東西に貫いており、交通の便が良い。いいたてむらの道の駅までい館が目立つ。かつては県道 12 号線沿いに 100ha ほどの水田が広がっていた。村が水田を買い上げてまでい館や集合住宅、太陽光発電のパネルを設置した。県道 12 号線をはさんで南側の土地も村が借り上げ、振興公社が水田耕作や花栽培を行っている。

文化・生活

かつては農業が一般的だった。冬は農業が出来ないため、炭焼きや建築用材の伐採など、山仕事を行う人も多かった。高度成長期に入ると、出稼ぎが始まり、村にも製造業が少しずつ入ってくるようになった。

相馬農業高校飯館分校が戦後に誘致された。震災の影響で 5 年ほど前に生徒の募集が停止され、最近本校への統合が決まった。高校では日中国交正常化後の日中交流促進の流れの中で、中国からの研修生受け入れを行っていたときもある。中国から農業研修生が飯館を訪れ、村民の家にホームステイし分校に通学していた。

あいの沢近くの山頂にある葉山神社のお祭りが伝統的に行われている。ふもとに籠り堂があり、祭りはそこで行われた。無病息災などを祈り裸足で火の上を歩く火渡りを行ったり祝詞をあげたりしていた。稲作が大きな文



市澤秀耕 行政区長

農家の長男として生まれ、村役場に勤めた後、野菜と自家焙煎珈琲を提供する「極久里珈琲」を村内で開業する。事故後は福島市内で店を再開し、休日には飯舘村の畑を管理している。移住者も総会や草刈りに呼ぶなど、行政区長としても地域のまとまりを大切にしている。

化として存在していて、豊作や山の仕事の安全を祈るお祭りであった。

伝統芸能としては、他の多くの行政区同様田植え踊りがあげられる。旧正月の時期に踊り子が各家を回って踊り、厄払いを行う。深谷地区でも30～40年ほど前には若者が年配の方に教わって踊りを練習していたが、今ではやらなくなってしまった。農業後継者が減るなど社会が大きく変貌したためであろう。貨幣社会の浸透によって生活が忙しくなり、夜集まって練習するなどの余裕がなくなってきたために次第に継承が行われなくなった。

地区を4つの組に分けて組対抗運動会を実施していた。組ごとに練習や応援を行い、運動会が終了したら皆で酒を飲み、地区総出で盛り上がるイベントであった。しかし、平成になったころから次第に下火になっていったという。行政区対抗の運動会もあり、こちらは事故前まで実施していた。

馬頭観音(馬や牛を供養するための観音様)が集落内の3か所に存在し、観音様が位置する参道をきれいにし、神主さんにお祓いをしてもらうお祭りを春秋に実施していた。場産地であったことの名残りである。

震災後は餅つきや出店のイベントはなくなったが、葉山神社の祭祀は続いている。行政区に4人いる祭典委員が世話役となって神主さんと呼んで祝詞を挙げてもらい、参拝する。2022年には山頂までの道の掃除を行った。

〔共同作業〕

昔から水田の用排水路の管理などは共同で行っており、現在でも作業が続けている。そのつながりは冠婚葬祭などとともに地域の連携を形作っている。

飯舘村の75%を占める山林の管理を営林署と合同で行う部分林組合が存在する。植林や下刈りを共同で行っていたが、放射線量の問題や林業の衰退で作業を行うことが出来なくなり、現在は繋がりが薄れている。

コラム

【図図倉庫】

震災を機に閉店になったコメリの建物を活用して開発中の環境問題にアプローチする秘密基地、図図倉庫(ずっとそーこ)。矢野淳さんや元地域おこし協力隊の松本奈々さんが中心となり、コメリ時代のつくりから多くを自ら手作業でコツコツと改修を進めてきた。地域につながりをつくることもねらいとして2023年には本格的に開業し、シェアオフィスなどでの利用ができるようになった。飯舘村や震災のこと、放射線のことを伝えるツアー活動の拠点ともなっている。

店 事業所

道の駅の西側に住宅が4軒あり、その内の2軒が商店であり、雑貨屋だった。現在では、「いいたてむらの道の駅までい館」がおかれている。「村カフェ 753」、「図図倉庫」、ディーラー、その他農協の施設がおかれている。あいの沢には、村営の「宿泊体験館きこり」やキャンプ場もある。

人 口

119人

最新（2020年）

1983年 410人

1998年 389人

2011年 317人



▲ ままでい館裏の公園(ふかや風の子広場)



▲ ままでい館前の県道12号線



▲ 民家園

▼ 一部に残る汚染土置き場



▲ 宿泊体験館きこり

▼ 県道12号線 後ろに村カフェ 753





▲ 毎年冬になるとまでい館裏手の「ふかや風の子広場」がライトアップされる。商工会の方の手作り。

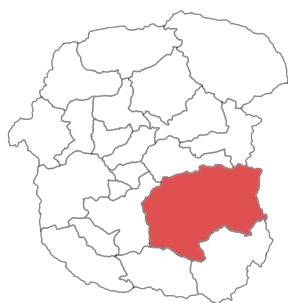
▼ 享保年間に築造されたあいの沢。冬だからか「あいの浮橋」はつながっていない。





5 区 | 小 宮 行政区

地理



村のほぼ南東に位置しており、飯樋と、関沢や草野を結ぶ県道が川筋に沿って走っている。おおよそ狭い谷間に位置する行政区。山を切り拓いて農地を作ったことから、段差が多く狭い農地が随所にあり、小規模な農作業が中心だった。山の冷たい水を使うことから、米の出来はあまりよくなかったが、川と岩部ダムがあるため、水の量で苦労することはなかった。

文化・生活

行政区の集まりとして、総会（3月末）、年2回の用水路の草刈り、県道の草刈りを行なっている。必要に応じて役員会が開催される。事故前は川の土手や中の草刈りもボランティアで行っていた。最近草刈りには補助金が出るようになった。小宮行政区には部会のようなものは置かれていない。老人会があり、旅行などを行っている。

かつて冬には薪需要を賄うための林業か、あるいは出稼ぎをしていた。また、稲作やたばこ栽培が盛んでいろいろな作物を育てていた。子牛の繁殖農家があり牧草地で放牧をする光景も見られたが、震災前からその数は減り続けていた。現在は、小宮牧野利用農業協同組合が管理していて、牧野には現在800本ほどの桜が植えられている。

宮内行政区の綿津見神社の支社が小宮にあり、綿津見神社の例大祭の時はお祭りが4-5



高橋正一 行政区長

姉3人に妹2人、当時としては一般的な大家族の長男で、相馬農業高等学校飯館校を卒業後、兼業農家でたばこの栽培と稲作を続けた。25歳からの名古屋での出稼ぎを経て、長い間斎藤運輸工業に務めた。仙台からフェリーに乗り、北海道まで野菜を運ぶこともあった。原発事故の復興事業にも携わった。

月の連休付近に2日間ほどにわたり盛大に行われた。夏には盆踊りも行われていた。新年会は、飲酒運転が厳しくなってからは行われなくなっていた。機械化前は、田んぼなどの共同作業、「結い」がある種行事のような役割を果たしていたという。飯樋小学校に統合される前は、小宮に小学校があり、現在のコミュニティセンターの位置にあった。グラウンドはそのまま残されている。もっとも、飯樋に近い山辺沢地区は統合前から飯樋小学校の学区だった。行政区には子ども育成会があって、夏休みすぐの日帰り旅行を行っていた。

事故前からの伝統芸能である田植え踊りを現在でも活発に行っており、民族芸能保存会として年に4回ほど、村外、さらには東京での演奏を行ったこともある。

大規模に耕作を行っている担い手は2軒。そのほか、小規模に耕作をする高齢の住民、また新規に営農を試みる移住者も入っている。現在では高齢者が多く、仕事をしている人も通える範囲の事業所に勤め、出稼ぎはない。

小宮の山奥に住む大久保金一さんは、使われなくなった農地を「マキバノハナゾノ」として整備し、春には桜やスイセンが一面に広がり隠れた名所となっている。



▲ マキバノハナゾノの桜並木

▼ 水仙の咲き誇るマキバノハナゾノ



コラム

【マキバノハナゾノ】

マキバノハナゾノは、いくつも小さな峠を超えた先に現れる桃源郷である。ここに住む住民がもっぱら管理をしてきており、桜や水仙が深い山奥の小さな平地に見事に咲き誇る。

店 事業所

小宮簡易郵便局がある。事業所としては、林業の大谷林業、建設・農業を行う福相建設、福島石販の作業所、産業廃棄物の処理施設が位置している。

かつては郵便局のそばに2軒ほど、山辺沢にも1軒ほど商店があった。また飯樋町に買い物に行っていた頃もあった。

人 口

60人	1983年	702人
最新(2020年)	1998年	552人
	2011年	436人



▲ 野手神集落



▲ 野手神山を登山口から望む

▼ 小宮簡易郵便局の前から福島県道31号線の東(関沢)方向を望む





▼ 小宮簡易郵便局

▲▼ 小宮の牧草地



▼ 稲荷神社



飯樋 4 区

飯樋 4 区とは、飯樋町、前田・八和木、大久保・外内、上飯樋の 4 行政区の総称である。現在の地域区分である行政区としてはそれぞれ分かれているものの、共同で催しを開くことも少なくなく、一定の文化を共有している。そこで、いったん飯樋 4 区共通の特徴を紹介したうえで、4 区それぞれの特徴を紹介することとする。



▲ 旧飯樋小学校より大雷神社を望む

地理



飯舘村を東西に貫く県道 12 号線から奥に入った場所にあり、県道 12 号線沿

いの草野や白石と比べ交通量が少なく、通りがかりで訪れる者も少ない。飯樋川源流近くの開けた谷間に 4 区の中心があり、村内でも広い平野に位置しているのが特徴である。この平野を共有していることが、飯樋 4 区の結びつきの一つの要因であろう。

飯舘村は 1956 年に大舘村と飯曽村の 2 村が合併してできた。この、飯曽村の役場は飯樋（飯樋町）に置かれており、飯舘村の中心地域の一つとして栄えてきた。

文化・生活

近隣の人々と田植えの際などに共同作業をする「結」という制度が色濃く残っていた。田植えは10日間ほどの限られた期間で終わなければならないこともあり、誰かが田植えをする際にはみんなで手伝うというのが当たり前だった。「結」においては、本家から優先して田植えするといったしきたりもみられた。この制度や、江戸期に山中郷（現在飯舘村がある地域）の陣屋（当時の役所）がおかれた、地域の中心という意識のおかげで住民の繋がりが強く、飯舘4区合同での行事も盛んである。田植え踊りは、役によっては結婚式で着るような格式の高い着物（江戸褌・黒留袖）を着て盛大に行われた。

村社である大雷神社（田の神様を祀っている）が地域の中心としての役割を果たしている。大雷神社の名前の由来は、昔日照りが続いて干ばつの危機にあったとき、神様に雨乞いをしたら突如雷が鳴ってにわか雨が降ったという伝説をもとにしている。この大雷神社のお祭りとして、3年に一度の遷宮祭が行われる。手踊りや報歳踊りの準備を一か月前から始めた。当日はアニメキャラクターなど

様々な仮装を手作りで準備した独創的な行列も、200kgもの神輿担ぎとともに名物だった。遷宮祭は、役員が関係する家に泊まり込む、密度の濃い行事だった。2017年の避難解除後2回行われている遷宮祭では、規模こそ縮小しているものの行列を再開しているほか、神事である遷宮祭にあわせて復興祭を開催し、舞台を作ったり、食事を振舞ったりするなどして人が集まるようなイベントに姿を変えている。

夏には、盆踊りが飯舘町の商店街で行われてきて、何千人もの人が集まった。盆踊りは避難解除された2017年に飯舘町団地の広場で再開され、コロナ禍でも対策の上継続し、再開された村内の盆踊りの中でトップクラスの人を集めている。

2023年には旧飯舘村の四季折々の風景をうたった飯舘小唄と踊りを記録するDVDが作成された。この中では、祭りや生活、炭焼きといった仕事の風景の収録して歴史を開説するナレーションも吹き込まれている。

地区の役員会は年に4回、4区合同で行われている。

店・事業所

〔飯舘町〕

現在村で3軒のガソリンスタンドの1軒、アポロステーションの「荒木屋」や、手打ちうどんが名物の「えびす庵」、スバルのディーラーの「渡辺輪業自動車整備工場」、「あがべご訪問看護ステーション」がある。かつてはこれらに加えて、酒屋2軒、農協、美容室4軒、中央食堂などがあった。

〔前田・八和木〕

「手渡板金工業」や建設関係の事業所がある。昭和には前田に雑貨屋も2軒ほどあった。

〔大久保・外内〕

大久保・外内行政区の営農団体の「いいたて結い農園」がある。行政区の頁を参照。

〔上飯舘〕

2022年に開業した宿泊施設の「ゲストハウスCOCODA」、車検・整備の他、上飯舘の防犯協力も担う「佐藤モータース」、地域おこし協力隊の大槻さんが開業しキャンドルを販売する「工房マートル」、塗装会社の「ハルミ塗装」、「村上石材」などの石材店、農業土木関係の会社の「佐藤建材」がある。最近小宮から「長田整骨院」が移転した。

人口

10 区 飯樋町

70 人

1983 年 516 人
1998 年 517 人
最新（2020 年） 2011 年 412 人

11 区 前田・八和木

74 人

1983 年 572 人
1998 年 411 人
最新（2020 年） 2011 年 346 人

12 区 大久保・外内

98 人

1983 年 472 人
1998 年 448 人
最新（2020 年） 2011 年 300 人

13 区 上飯樋

75 人

1983 年 700 人
1998 年 666 人
最新（2020 年） 2011 年 531 人



▲ 統合前の飯樋中学校（村役場提供）



▲ 飯樋幼稚園の新園舎（村役場提供）



▲ 飯曾小唄を舞う様子
（坂井欽一さん提供）



▲ 飯樋中学校 メモには「卒業式 91 名」とあるが、入口の上には「文化祭」との文字がある（坂井欽一さん提供）



▲▼ 遷宮祭の行列の様子。上図左上には神社から飯樋町に移したご神体の小屋がある（1998年、坂井欽一さん提供）



▲ 飯樋町上組の大雷神社の遷宮祭の記念写真（1998年、坂井欽一さん提供）

▼ 飯樋町の陣屋跡



▼ 飯樋と草野を結ぶ村道より上飯樋、花塚山、風力発電所を望む





10 区 | 飯樋町 行政区

地理



飯樋4区の地理的にもおよそ中心に位置する面積としては小さな行政区。さらに上組、下組に分かれる。

「文化・生活」でも紹介するように、旧飯曾村の役場や各種施設、商店が集まる場所であった。

文化・生活

江戸時代までは原町から飯樋町、比曾を通して二本松へと馬で塩を運んでいたために宿場や馬の休み場があった。宿場時代の名残として、「大黒屋」「荒木屋」といった屋号が残っている。飯樋町で馬の競りなどをしていたので周囲の地域の中でも一際栄えていた。政務を行う陣屋を中心にした藩政関係の施設があり、周辺には相馬藩や中村藩の見廻り役人のための役場が置かれていた。

明治時代になってからは廃藩置県により藩政関係の施設はなくなったが、在郷給人（地方に住み年貢などの取り立てをする武士）は住み続け、馬市も続けられた。明治30年ごろには飯樋と草野で隔年で馬市が行われていた。昭和3年には公共・行政施設が増えてきていることが確認されている。

飯樋4区の中心であり、建物が密集して並んでいた。商店が立ち並ぶ通りには様々な



渡辺富士男 行政区長

5年間東京でトラック運転手や旋盤工などさまざまなスキルを積んで飯館に戻り、洗濯屋を営んでいた。オートバイが趣味で、若いころには日本一周の旅をしたこともある。最近では飯館の方言集を編纂し自費出版し、村の広報委員も務めている。

雑貨屋さんがあり、周辺集落の自給経済を支える商業地でもあった。最盛期には10軒ほどの商店が並んでおり、各店はそれぞれ強みの商品を持ちながらも「なんでも屋」といった様相であった。幼稚園、小学校（共に事故時まで飯樋町に）、中学校（1988年に伊丹沢にできた飯館中学校へ統合）があり他の地区からも子供達に通っていた。近くには武道場もあり、そこは子供たちの遊び場になっていた。飯館村時代の役場も飯樋町に置かれており、入院もできるような規模の病院や母子センターも置かれていた時期がある。飯樋小学校は、建物が2021年ごろに改装され飯館村防災センターとなった。

飯樋町の裏山にあたる前山の上には20年ほど前から地区独自のパークゴルフ場が整備されていて、大会が月に2回、それ以外は好きな日に交流している。年会費を払えば使用回数の制限がなくなるため、最近ではここでのパークゴルフが地域全体の交流の場ともなっている。行政区や老人会の温泉旅行が定期的に行われ、住民の楽しみの一つとなっている。

村営住宅が新築され、移住者の若い世帯がいることも特徴的である。



▲ 飯樋町から牧舎のある谷間と丘を望む



▲ 前山のパークゴルフ場
パークゴルフ愛好会が管理を行う
休業中の飯館郵便局



11 区 | 前田・八和木 行政区

地理



大久保・外内から飯樋町へ入る交差点を東に進むと前田・八和木行政区に入る。飯樋4区の南東部を占め、西は上飯樋、東は小宮に接する比較的に広い行政区。飯樋川とその支流である前田川と八和木川が流れており、水の豊富な地域である。

文化・生活

【事故前後を通して】

前田地区と八和木地区が隣接して一つの行政区を作っている。もともと別地区であったところ、それでは小さすぎるため前田と八和木が一つにまとまったという。さらに前田地区は3つの、八和木地区は2つの組に分かれており、普段の話し合いや草刈り、大雷神社のお祭りの際などこの組ごとに行動することが多いという。なお、3年に1度開催される大雷神社の例祭では飯樋4区合同で神輿を担ぎ、飯樋町に運んで夜を明かすというものであるが、この際飯樋町で泊まる宿も組ごとであったという。行政区が一つとなっていく行事といえば、年に一度春の総会と年4回程度の役員会である。かつては、役員会の後に懇親会でお酒を飲み明かすことも多かった。

農業では、以前は他の行政区と同様小規模



今野茂之 行政区長

農業をしつつ、40年ほど斎藤運輸工業でクレーン車の運転手を勤めた。村の中では最も勤務年数が長いという。かつては、東京まで出稼ぎにいったことも。現在は行政区長として精力的に住民と関わり、行政区ににぎやかさを取り戻そうと家にはイルミネーションも設置している。

で葉タバコの栽培をする農家が多かったが、手作業が多く震災前から別の農作物に移行する人が一定数いた。現在比較的広域で栽培されているのは米カナタネである。ビニールハウスでシイタケを栽培している住民もいる。ナタネは契約栽培をしており、収穫・乾燥・ゴミ取りをした後、南相馬の契約先に出荷している。とくにナタネは油が取れる商品作物であるだけでなく、春には黄色のきれいな花が咲く景観作物でもあり、畑一面に菜花が咲く様子は前田・八和木の特徴的な景色のひとつである。飯館では兼業農家が多く、前田・八和木でも同様であった。このほか、現在では大きく繁殖を営む畜産農家が1軒ある。

新しいことにチャレンジする人が多いのも特徴的で、震災前は養蜂事業を行う人や、ナマズの養殖を試みる人もいた。また、牧草地の一部を借りてモトクロス（オフロードをオートバイで走る競技）場も運営されていた。



▲ 今野区長の栽培するナタネ畑
(今野区長提供)

▼ 行政区の集会所 観音様が隣接している。最近まで鳥居が集会所の正面にあったが、移設された。



▲ 八和木の牧野（1983年、役場提供）



▲ 前田上組 比曽とを結ぶ通り



12 区 | 大久保・外内 行政区

地理



草野や村役場から飯樋へ向かう村道を通っていくと、役場を過ぎたところで坂を下る。その先すぐに現れるのが大久保・外内行政区である。飯樋4区の東北あたりを占める、比較的小規模な行政区で、平地と斜面の境目でゆるやかな傾斜のある景観が特徴的である。

文化・生活

震災前、他の村内の行政区と同様に稲作や葉タバコ、インゲンの栽培や牛の飼育を行っていた。事故後のコミュニティとしてもっとも特徴的なのは、「いいたて結い農園」の取り組みである。事故後6年もの間避難を強いられたことから農家としてのブランクがあり、また帰村した住民も高齢の方が多いため、再度家畜を飼ったり大型機械を扱うといった重い作業を行うことは難しい状況にあった。そうした中、農地の維持管理や地区のコミュニティの維持、健康維持のための機会づくりのために作られた、軽い作業でできる農作業を集団で営む法人が、「いいたて結い農園」である。当初は蕎麦や、粟といった様々な雑穀類にも挑戦し、最近では健康によいえごまの栽培に注力している。えごまは手作業で丁寧に収穫しないと油の品質を損ねるため、結い農園のコンセプトにかなった作物



長正増夫 行政区長

長く村役場に勤め、飯舘牛のブランド化や若妻の翼事業（村外から嫁いできた女性を対象に、海外旅行などを企画し親睦を深めてもらう）といった先進的な取り組みを主導した。現在も、「いいたて結い農園」の役員や飯舘小唄記録動画作成を主宰するなど、地域を引っ張り続けている。

となっている。えごまを食べると10年長生きするという言い伝えが由来となり、地元ではもっぱら「じゅうねん」とよばれている。さらに、化学肥料や農薬の使用を抑える努力をしており、栽培のみで採算を取ることが難しいため、えごま油の加工といった加工過程も自前で行っている。品質を保つため、受注を受けてから油を絞ることを決めている。ちなみに、水はけが悪いなど商品作物の栽培に適さない農地では景観作物としてあやめ類を栽培しており、シーズンには村道からもよく見える。また、飯舘4区の柱である大雷神社が所在する地区でもある。



▲ 飯舘と草野を結ぶ村道から村営笠石住宅方面を望む。村営住宅には若い移住者などもいるという。

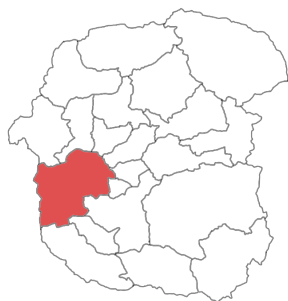
▼ 集会所と観音様の松





13 区 | 上飯樋 行政区

地理



村内最高地点にあたる花塚山が上飯樋と川俣町の境に位置している。この花塚山は、富士山が見える最も遠い地点として有名である。村の山としても親しまれてきた。事故後登山道は荒廃しているが、最近再び整備をする機運が生まれている。飯樋川流域に農業用水を供給する岩部ダムが飯樋川の上流部にある。

文化・生活

【事故前後を通して】

上飯樋では、大火地区と宮仲地区で「奥州相馬大火神楽団」と「奥州相馬宮仲神楽団」の2団体の神楽が活動している。それぞれの神楽に芸能保存会があり伝統芸能の保全に努めているが、高齢化が著しいのが現実である。かつては華やかな宝財踊りもあったが、こちらも後継者不足により十数年舞われていない状況にある。そのため、踊りの負担を減らした子どもの神楽を創設しようという「ひもろぎプロジェクト」が立ち上がり、事業化を目指している。新しい取り組みとして、13区の音楽祭をこの4年程開催している。

農業関係では、上飯樋を始めとした飯樋4区のかかなりの割合を耕作している集落営農団体である2つの営農組合が拠点をおいている。事故後、商品作物の栽培ができない時から農地管理を行い、当時栽培に補助金が



鈴木秀範 行政区長

村外の農業短大に2年間通った後、全村避難の期間を除いては飯舘に住み農業を続けてきた。現在では村で唯一のミニトマトの水耕栽培に力を入れており、全国的に見ても数少ない先進的な技術を取り入れている。

出ていた景観作物の栽培を共同で開始した。2019年に法人化し、農地の集約を担う中間管理機構を通じて100haを超える農地を借り、大型機械を用いた耕作に乗り出した。用排水や河川の整備、草刈りを自主的に行う環境保全隊を結成し、地区のインフラ整備に注力しているという。

村の総合計画を立案するのに伴い、10名以上からなる有志委員会が地域の魅力づくりに取り組んでいる。



▲ 上飯樋の集会所



▲ 岩部ダムの堤体



▲ 岩部集落の入植の碑

▼ 上飯樋にもまだ除染関係の土が残る

▼ 上飯樋の大火方面を望む





14 区 | 比 曽 行政区

地理



村の南西部に位置しており、北に上飯樋と前田・八和木、東に長泥がある。山をはさんで川俣町や浪江町にも隣接していて、古くは相馬から中通りへ塩を運搬する「塩の道」も通っており、川俣町との往来も昔から盛んであった。川俣町との境には疣石山（いぼりいしやま）がそびえている。飯舘村の中でも標高が高く、冷涼で針葉樹が多い。地区の中心を西から東に向けて比曽川が流れている。

文化・生活

「比曽」という名前の由来として、
 ①「ヒノキ」が多く植えられている
 ②村の中心部、または中通り地域から離れているため「潜む」という語が転じた
 ③「木曽に比すべし」ところである
 など諸説ある。

気候の厳しい分、地域での助け合い精神は強く、水路の泥上げや道の草刈り、冬の雪かきなど役場の手が届かないところも協力して行ってきた。行政区の各家庭の歴史などをまとめた冊子も作られている（コラム参照）。

比曽村はかつては比曽、長泥、蕨平の3区からなっており、高冷地であるため昔から冷害に悩まされてきた。米が一粒も収穫できないほどの大凶作の年もあり、江戸時代には百数十軒あった家が飢饉で7軒ほどにまで減少したとの言い伝えもあり、村内の中でも特に被害の大きな地域であった。湿田が多い



菅野義人 行政区長

飯舘村出身。農業短大を卒業後、昭和47年に飯舘村で就農し、専業農家として牛の繁殖農家を営んできた。若いころは農協青年部で、現在は行政区長として精力的に活動している。

地域であったが、昭和10年ごろに暗渠排水の設備が整ってからは馬耕ができるようになり、収量も増加した。一方、山の源流に近く、水の確保には苦勞してきた。

戦前には他地区と同様、副業として養蚕も行われていた。しかし、昭和前期ごろに葉タバコの生産が始まり、徐々に養蚕の規模は縮小していった。

飯舘村は江戸時代から馬産地として名高かったが、比曾はその中心地域であった。仔馬は貴重な現金収入になったほか、うまや肥（馬の糞と稲藁を混ぜ発酵させて作る肥料）ができたため、多くの家庭で牝馬を飼育していた。種付け用の牡馬は地区全体で3頭ほど飼育しており、田植え前の放牧で自然と種付けが行われる仕組みであった（畑の周りなどには簡易的な柵をこしらえ馬が侵入しないようにすることで放牧が成り立っていた）。戦後になると市場での仔馬の値段が下がってきたため、徐々に馬産が衰退し、代わりに和牛を育てるようになってきた。

・比曾の獅子（三匹獅子舞）

300年程前から伝わる「比曾の獅子」は、三匹による獅子舞である。田神社、羽山神社、愛宕神社、稲荷神社の四か所の祭礼の際に実施されていた。かつては青年団により運営されていたが、昭和43年に「上比曾郷土芸能保存会」を結成し、以降は保存会により管理されている。練習は、保存会の会長宅などで農閑期や節句、祭礼の前などに数日から一週間程度行った。

・田植え踊り

凶作に悩まされてきた比曾の人々は豊作への願いを強く抱いており、300年ほど前から田植え踊りが伝わるという。小正月を中心に実施され、承諾をした各家で踊りを舞っていたが、昭和43年からは集会議場で踊るのみとなった。運営は主に青年により担われた。明治37年には青年会が結成され、15歳から25歳までの男性は全員加入の義務があった。この中から計3名の世話人を選び、運営を主導した。田植え踊りが終わるとすぐに会計報告を兼ねた慰労会が行われ、散会するのは夜半過ぎであったという。

震災後、地域に居住する住民は少なくなった。それでも、行政区の規約を改正し世帯主だけでなく住民全員による議論を大切にするようにしたほか、村外に移住した人にも農地管理の話については連絡することを決めた。このような話し合いによって構成員の意識が地域に向いていくことを区長の菅野さんは願っている。

コラム

【比曽地区史】

村の第四次総合計画の中で、「地区別計画」が行われ、10年間の期間のなかでそれぞれ、地域づくりの方針を決め、実施することになった。比曽地域では、地域内に4か所の「ミニ公園」建設、「水芭蕉」の増殖、「比曽地区史」の編纂等の計画をたて、その一環として行われた。地域内に居住する家族ごとの写真や家系、比曽の歴史、民俗芸能等に分かれ、資料の収集や、写真撮影などすべて、地域住民の手で編集され、2006年に完成した。

店
事業所

昭和には食料品店やガソリンスタンド、酒・タバコを扱う店などがあった。震災前には縫製を行う事業所も1軒あった。

人 口

35人	1983年	472人
最新（2020年）	1998年	448人
	2011年	334人

▼ 田神社





▲ 羽山神社

▼ 長泥との境界に 2023 年 5 月 1 日 10 時まであったゲート。帰還困難区域に指定された長泥は 6 年遅れて居住や立ち入りが可能となった。



▲ 比曽行政区の集会所 かつては比曽小学校があった

▼ 比曽の郵便ポスト 2017 年の避難解除後も使えなかったが、2021 年に利用できるようになった。





17 区 | 関根・松塚 行政区

地理



東西に約 2km、南北に約 1km 程度の比較的小さな地区。行政区の中央を東西に新田川が流れている。他の行政区と比較して高い山も少なく、中央部には水田が広がっている。村のほぼ中央に位置している。

行政区名は「関根」「松塚」の 2 地区が集まったような形になっているが、長く一体のものとして運営されている。「関松（せきまつ）」とも呼ばれている。

文化・生活

「関」の由来は、中世に新田川の水を「堰（せき）」止め水田を開いたことに由来すると考えられている。地区の集会場のそばにある神社に年に一度、10 月ごろに集まり、例祭を行っている。地域のほとんどの人が集まって、神主さん呼んで拜んでもらい、終わった後に集会場で集まって食事をしてきたが、遠方から来ており、飲酒もできないことやコロナ禍もあり様子も変わっているようである。新年会や 3 月下旬には行政区の総会を行っており、総会は現在でもほとんどの世帯が参加している。予決算や事業決め、報告が行われている。加えて、年に 3 回役員会が開かれる。行政区は部会に分かれて運営されている。現在は広報部と衛生部が、以前は加えて納税部、体育部、産業部、保健部、防災部、教育・文化部、建設部、生活婦人も置かれていた。



佐藤建夫 行政区長

飯館の農家で育った。長男ということもあり、跡を継ぎ、葉タバコや田んぼを中心に農家をしていた他、冬場は建設業に携わっていた。現在でも、自宅前の水田で耕作を続けている。行政区長は2022年から務め、1期目。行政区を守るべく試行錯誤を繰り返している。

戦前から葉タバコの生産が盛んであり、畑の大部分や、転作した田んぼで栽培していた。昭和44年に松塚の基盤整備が終了したことに伴い松塚葉タバコ生産組合（通称：松塚協業）を始めた。ただ法人での耕作の困難もあり、10年ほどで組合は閉じたが、それまで各戸で生産されていた葉タバコを法人化して生産するようになったのは福島県内でも初めてだったようである。タバコのほかにも水田協業や草地利用組合を作って、山林を切り開いた牧野を活用していた。また、飯館の寒暖差の激しい気候を活かした花の栽培や養蚕業も行っていた。他の行政区同様戦前まで馬の飼育を行っており、戦後は和牛の生産も始められた。繁殖農家が多くを占めていた。

12～3月は農閑期のため、村外に出稼ぎに行く人も多かった。また、兼業農家も多かった。田植え踊りや盆踊り、夏祭りが行われていたが、事故前から既に人口も減っており、数年に一度の開催となっていた。

溜池を利用した釣り堀が開設されたこともある（1998年頃）。

白石小学校が現在の位置に移るまではグラウンドが狭く、関根松塚行政区内の広いグラウンドまで数キロ、机や椅子を子供が担いで歩く光景が見られた。

農業を実際に営んでいる家は10戸ほどである。県道12号線に面していることから交通の便はよく、帰還率は比較的高い。畜産農家による大規模畜産が2017年から開始され、行政区内の多くの休耕田を借りて牧草を作っている。最近では、水田を放牧地として使う先進的な取り組みを福島大学などとも連携しながら行っている。カスミソウやトルコキキョウ、アルストロメリアなど、花卉栽培に精力的に取り組んでいる花農家もいる。

年に一度、日帰りでブドウ狩りやサクランボ狩りといった旅行を行い、顔を合わせる機会をもうけている。

NTTファシリティーズが建設した、約6,600世帯の電気をまかなえるという広大な太陽光発電パネルもみられる。

店 事業所

牛の繁殖農家と食肉の注文販売を行う「株式会社ゆーとぴあ」が所在する。事故前には地名から名前をとった押口商店という商店も営業していた。



▲ 「ゆーとぴあ 17」の復刻版3冊



▲ 関根・松塚の集会所

コラム

【ゆーとぴあ 17】

ゆーとぴあ 17 は 1980 年 5 月 1 日に創刊された行政区の情報紙である。理想郷を意味する「ゆーとぴあ」と、地区の番号の 17 から取ったものである。2019 年頃までは毎月、その後は 2 ヶ月に一度発行して住民をつなぐ大切な役割を果たしている。最初は「関根松塚活々集落づくり委員会」が、その後は行政区の広報部が担当している。

長い間手書きのスタイルが好評を博していたが、書き手の不足もあり最近では機械印刷をしている。事故前後の号を集めた復刻版第 3 巻では、建て壊す前の家の姿を写真にとどめ各家庭の系譜をまとめた。近年は生活場所が離れていることもあり書き手の確保には苦労している。

▼ 牧草地と放牧される牛（図中央やや右上に見える黒い動物 2 匹）
右端には牧草ロールも見える



▼ 神社とのぼり しめ縄とのぼりを掲げる。のぼりは木製で人力で立てる。



人口

51 人

最新 (2020 年)

1983 年 263 人

1998 年 246 人

2011 年 188 人



▲ 関根・松塚の山から行政区を一望する かつては山頂まで登山道があったが、管理の問題もあり最近撤去された。田んぼ右側に見える大量の黒い物体は太陽光発電パネル



▲ 谷地向附近
▼ 見晴らしの良い高台へとつながる道
一つ前の見開き頁の扉写真はこの上から撮ったもの



▲ 関根の新田川の平野
▼ 村道と白石をつなぐ2車線道路





18 区 | 白石 行政区

地理



飯舘村の中では、真ん中から少し西寄り
のところに位置する。行政区を東西に川俣
から原町（南相馬）へ抜ける県道 12 号線
が通り抜けており、沿道の他の地区と同様
に比較的車通りの多く賑やかな地区。川俣
のほうから訪れると、二枚橋を過ぎて急な
坂を下ると町が開け信号のある交差点にぶ
つかる、印象に残りやすい場所である。

文化・生活

主要な県道が通り交通の便が比較的よいた
めか、村内では珍しく 1980 年代からも人口
が増加する地区であった。ただ、農地は少な
く多くは兼業農家といった勤め人で、専業農
家は早くからいなくなっていた。

1 月に正月の新年会があり神社にまわり
（入り口に掲げる高い棒）と旗を掲げて集まっ
て櫛宜（神職の一つ）を呼んでお祓いをして
いた。まわりは先から軽く扱いやすいアルミ
のものに最近更新した。3 月には部落の総会
を行っている。4 月と 10 月にはお祭りがあ
り、神主さんと呼んで祈祷を行い、お酒と弁
当を配布している。夏には盆踊りも行ってい
た。お祭りでは餅つきをできないかと計画中
である。集会所がなかったころには、行政区
の集まりも神社で行っていた。

事故前村内に 3 校あった小学校のひとつ、
白石小学校が高台に位置している。小学校の



林英滋 行政区長

駅伝のランナーを20回ほど長く務めた。そば栽培は2021年に再開した。行政区の交流が少ないことに危機感を感じており、年に一度研修旅行をできないかと模索している。道の駅までい館で手打ちそばをふるまう愚真会のメンバーである。

運動会は、子供が50人前後と少なくなかったこともあり、2000年頃より保護者の団体「水芭蕉会」を中心に住民も混ざって参加するようになった。学区域となる4行政区（白石、関根・松塚、前田、二枚橋・須萱）が対抗でリレーなどをやっていた。大人も合わせて全部で200人くらいが集結し、大賑わいの機会となっていた。旧白石小学校には現在企業が入居しており、夜間にはイルミネーションが見られる。1963年の校庭拡張まで関根・松塚のグラウンドで運動会を行っていた。同年、村内で最も早く給食を導入した小学校でもある。

震災後の帰村率は村内で最高の5割程度であるが、若い住民は避難先で新しい職を見つけて帰還せず、お年寄りも村外のかかりつけ医に見てもらうため、また避難先に戻って行ってしまうという問題がある。

正月の新年会、3月の総会は継続されている。また、7月末にお墓の掃除、草刈りを行っている。現在でもこれらにより一年に3回程度は行政区の住民が集まる機会がある。2022年からは花壇の整備も行政区として手掛けており、年に2〜3回協力した住民が集まっている。さらに2023年には、村道と県道、農道の草刈りも行政区で引き受けている。全部で5回ほど行い、集まる機会が増えた。参加者との話し合いを経て、2024年からはさらに増やすことを予定している。



▲ ふくしま駅伝第8回大会優勝時の写真（飯舘村提供）

コラム

【町村対抗駅伝】

飯舘村の誇りであったのが、県内の自治体対抗で行われる駅伝大会である。飯舘村は強豪で、村の部ができた第4回から第13回まで10連覇するなど、大会のおよそ半分で優勝を収めた。目立つ赤色のユニフォームであることもあり、走ると注目を浴びたという。

当時走っていた子供の一人はいま中学校の先生になり陸上の指導をしており、なんと指導した中学生が全国一となるなど、勢いは今も引き継がれている。仙台育英に進学し全国高校駅伝で優勝した子供もいる。

最近は人口が少ないこともあり、小中学校の先生や役場の職員の応援ももらいながら、なんとか出場を続けている。

店 事業所

かつては庄司商店、林商店、相良商店があったが、現在ではいずれも営業していない。また、約30年前から事故前まで20年ほど庄司商店がコンビニエンスストアのローソンとなり県道の交差点の角に位置していたが、草野にできたセブンイレブンとの競合もあり、閉店した。現在、営業している店は花井理容店の一軒。

一方、事業所は現在でも複数位置している。草野から移転した飯舘村森林組合の事業所が県道沿いにあり、現在では敷地にたくさん木材が置かれているのを見ることができる。地元出身、東京で技を身に付けて起業した林製作所も目立つ。主に村外からの従業員や外国からの技能実習生が多数在籍し、カメラ部品の製作を行っている。交通の便の良さをもとに飯舘から移転した斎藤運輸工場の事業所も位置している。カネコ林でんきや、英工務店、高橋組の事務所、濱田石材工業の作業所が白石に置かれている。

人 口

114人

最新（2020年）

1983年 257人

1998年 304人

2011年 297人

▶ 村営住宅。かつてはこの敷地は高台に移転する前の白石小学校だった



◀ 白石神社 本文にもあるように、かつてはここで集会も行った。



▲▼ 交差点より北側を望む

▼ 白石の集会所



▼ 神社の「まわり」の根元のほう

▼ 林区長が栽培する開花時のソバ畑
(林区長提供)



編集後記



編集長・教養学部4年

松野大河

飯舘村に初めて来てから2年半ほど。飯舘村の素晴らしい自然と迎えてくださる皆様のおかげで、今でも飯舘村を訪れるたびにわくわくしています。各行政区に様々な特色があり、それをまとめあげるのに想像以上時間を要し、自分が卒業するまで半分の10区しかご紹介できず、未練もあります。ただ、そうだよねこうだったよね、というのや、あの地域は今こんなことやってるのか、といった形で見ていただければ、編集長としてこの上ない喜びです。

私は2024年春から京都にわたり行政学や地方政治の研究をすることになります。地方自治体に関心を持ったのも、飯舘という地で農村という存在と深くかわるようになったことが大きいのです。この飯舘で学んだことを糧に、地域をどう作っていくか、住民とつながりながらも自治体や政府がどうあるべきか、そして災害が起きた場合にどう対応すべきか、そのような問題へ一つのヒントとなるような研究もできればと思っています。遠方にはなってしまいますが、今後も飯舘に足を運び続けて行きたいと思っています。引き続き温かく迎えてくださりますと幸いです。



法学部3年

高橋和希

取材活動を通じて、様々な方から個性ある行政区のお話を伺うことができたこと、大変嬉しく思います。村民の方が持つ自らの村や行政区への誇りと愛を感じ、自分自身何度も心温まりました。この冊子が、こうした村の方の「想い」、そして個性あふれる飯舘村の魅力を届ける一助となれば幸いです。



農学部内定2年

圓林悟

各行政区を記録し、地域を紹介することが行政区ずかんの目的でしたが、様々な方にお話を聞く中で私たち自身が地域について多くを学ぶ機会を持てたことを嬉しく感じています。読んでくださった方々が、私たちと同じように新鮮な驚きをもって飯舘村を見つめてくだされば幸いです。



農学部3年

橋本将

震災の影響で住人が戻っていない地区が多い中で、ある程度住民が戻っていても、高齢化やコロナにより祭りなどの伝統が危機に瀕している地区が多いように感じました。震災、高齢化、コロナなど多くの問題が複雑に絡み合った中で地域の特色を生かしながら地区の伝統を守っていこうという区長さんの気持ちがよくわかりました。



文学部4年

小関愛実

行政区長の方々からお話を伺ったことで、文献等では知り得ないような、行政区ごとの歴史や暮らしの様相を学ぶことができました。行政区によって異なる色があることがわかり、新たな視点から飯舘村を見ることができるようになったと思います。このずかんを通して多くの人に飯舘村をより深く知って頂けると嬉しいです。



農学部内定2年

森川はなの

実際に行政区長や村の方々にお話を伺うことで飯舘村に対する知識が深まりました。同時にもっと知りたいという思いも芽生え、飯舘村に足を運び続けてきました。実際に取材をしたからこそ伝えられる各行政区の昔の話や現状を少しでも鮮明に読者の皆様にお伝えできていれば幸いです。



教養学部1年

武田知士

取材・掲載を快諾してくださる方が非常に多く、その温かさが印象的でした。ひょんなご縁ではありましたが、関係者の皆様には感謝の思いでいっぱいです。今後も飯舘村で活動させていただく予定です。またどこかでお目にかかれることを楽しみにしております。

東大むら塾とは

東大むら塾は、地域おこしや農業に関心のある学生が集まり活動しているサークルです。地域の方との関わりや富津での農作業を通して、農村のこれからと自分たちにできることを考えています。飯館村の他、千葉県富津市、北海道栗山町でも活動しています。



道の駅花壇整備

佐須の菅野宗夫さん、比曽の菅野啓一さん、関根・松塚の高橋日出夫さんにご協力いただき、福島大学の学生もいっしょになって「までい館」に花壇を設置し、チューリップやマリーゴールドなどを育てています。



教育

飯館村の若い世代とも交流したいという思いから定期的にいいまで希望の里学園の学童と交流しています。2023年春にはLINEスタンプを作るワークショップを行うなど、子供たちとの関わり方を模索しています。



林業広報

担い手不足など元からあった問題と原発事故による山林の放射能汚染といった、飯館の林業は複雑な課題に直面しています。私たちは飯館村の林業を盛り上げようと、森林組合と協力して動画の作成に取り組んでいます。



イベント開催

飯館村の今を知り、未来を考えていくにあたってむら塾が大切にしているのが、村に関わる様々な方との交流です。他大学の学生を交えた学生サミットや、地域の方をお招きした流しそうめんなどを行っています

いいたて行政区ずかん

2022.8 ~ 2024.1

2024 年 1 月 16 日発行



発行者 東大むら塾

編集 東大むら塾飯舘部 ©

松野大河 圓林悟 武田知士

森川はなの 菊地愛麗 小関愛実

高橋和希 橋本将 松田治之

谷保梓樹 伊藤裕貴 中尾創

留野倭多 富岡幹貴 森本早紀

吉原圭祐

